

「Algal Resources」の創刊にあたって

日本応用藻類学研究会は2001年5月23日に発足以来、年1回のシンポジウムを行ないつつ8年目を迎えています。本研究会は発足の当初から、早期に学会への移行を希望する意見がありましたが、諸般の事情から当面はシンポジウムによる情報交換と交流を中心に活動の充実を図ることで運営されてまいりました。

2002年に第1回の春季シンポジウムを開催し、初めてのテーマにふさわしく「応用藻類学研究の現状と課題」としました。翌年以降、第2回は「藻場造成事業の実際と問題点」、第3回は「有用海藻類の成熟特性と種苗生産の新技术と展望」、第4回は「アマモ類の多様性と漁業・自然環境の保全と再生」、第5回は「海藻の等級とおいしさ、海苔、ヒジキ、ワカメ、寒天」、第6回は「ホンダワラ類の機能と利用」で、基礎から応用にいたる幅広い分野の課題を網羅して論議を行なっていただきました。ご講演者には会員以外の方々も多数参加頂き、時には会場が満杯になるほどの盛況で、企画や発表内容に関しては毎回、高い評価を頂いております。

本研究会会員は、このような活動を通じて、現在90数名に達し、海藻の応用学に関わる研究組織としては国内外でも一定の規模を誇るまでに発展してまいりました。このような本研究会発展の中で、昨年の総会では、従来からの懸案であった学術誌の刊行を決定し、最近では外国人研究者の入会もあるなど、学術組織としての体裁が整いつつあります。しかし、日本海藻協会は去る10月22日の総会で協会規約の全面的改正とともに、2008年1月からは日本海藻協会傘下の日本応用藻類学研究会の分離を決定しました。この決定は当研究会が要望したものではありませんが、当研究会としては独立することによって、会員の学術的な要望に的確かつ迅速に答え得る組織への飛躍の時期として捉え、皆様とともに当研究会の更なる発展に向けて研鑽を重ねる好機とも考えています。さらに、当研究会が独立後も日本海藻協会会員とは互恵的関係の維持に努め、海藻に携わるすべての皆様にとって、今以上に有益な学術組織となるよう、多くの皆様の声に心耳を傾けて参りたいと考えております。

以上の経緯から、「Algal Resources」はこの時期の創刊となりましたが、日本応用藻類学研究会活動の更なる発展の第一歩となりましたことは、会員皆様の応用藻類学研究への真摯な思いが実を結んだものと考えております。今後も皆様とともに暖かく、大きく、真面目な学術運営と幅広く、思索に富んだ雑誌として育てて頂くことを希望しています。

当研究会は研究会の目的に沿った任意参加の研究者集団です。その組織運営や活動は当然のことながら研究会員のコンセンサスに基づきます。しかし、時には多くの他学会に見られるような権威や威光、虚栄に執着する個人や多様な非組織的な動きによって組織運営を困難に陥らせる場合があるかもしれません。日ごろからそれらの感覚を極力排して、いずれの会員も真に学術的興味を開花させ得る学術組織および雑誌となるような運営や編集方針を堅持するよう希望するものです。

2008年6月1日

日本応用藻類学研究会会長
能登谷 正浩